

原著

掲載誌：作業療法 25(5), pp.393 - 400, 2006

コミュニケーションとしての作業・身体 Occupation-Body as Communication

山根 寛

京都大学大学院医学研究科

Hiroshi Yamane

Graduate School of Medicine, Kyoto University

要旨

通常の生活においては、身体図式・身体像が、対象との相互性の中でダイナミックに変動しながら安定性を保っているため、私たちは身体を意識することなく環境や状況に適応し生活している。病や障害により、身体図式・身体像に歪みが生じ、自己と身体、生活との関わりを失う。この失われた関わりを取り戻すプロセスは、自己の身体の確かめから始まり、身体がリアルな存在になることで、新たな生活の再構築へと向かう。この回復プロセスで、重要な役割を果たす身体をどのようにとらえてきたのか、古代ギリシャの哲学的霊魂観に始まる二元論的身体観、心身一如の東洋的身体観を振り返りながら、作業療法における作業そして身体について考えてみる。

キーワード：作業，身体，コミュニケーション

Key words：Activity, Body, Communication

Occupation-Body as Communication

By

Hiroshi Yamane

From

Graduate School of Medicine, Kyoto University

We are born with the sole body. Through our own body, we recognize the object, convey our own will and realize own desire. But, in daily life, we are not conscious of the body. Because of the body schema and the body image being kept in dynamic change and stability through the interrelation with the object, we can adjust to the environment and live. An unexpected disease, and resulting disability, may destroy the relationship between an individual and one's daily life. The recovery of that lost relationship begins with a confirmation: "Is own body moving or not?" The reconstruction of a new life starts by regaining the realization of one's own body's existence. By reconsidering mind-body dualism, mind-body correlation, body-mind oneness and our views of the body, I clarified the correlation between activity and body in occupational therapy.

Key words : Activity, Body, Communication

はじめに

ひとは、予期せぬ「やまい」や「しょうがい」により、生活とのかかわりを失う。失われた生活とのかかわりを取り戻す試みは、わが身が「わが（思う）まま」に動いてくれるかどうか、「自己の身体のかめ」から始まる。わが身が「ともにある身体」としてリアルな存在になることで、あるべき生活の回復もしくは新たな生活の再建へと向かう。

この生活とのかかわりを取り戻すプロセスは、自己と身体との語り（コミュニケーション）、自己と生活との語りといってもよい。作業療法は、「活動の再体験」と「良質な休息」を提供し、その「語り」の場をつくる。

古代ギリシャの哲学的霊魂観に始まる二元論的身体観、心身一如の東洋的身体観、ひとは身体をどのようにとらえてきたのかを振り返りながら、作業療法における作業そして身体について考えてみる。

身体観：心身二元論の世界

ひとは、身体をどのようにとらえてきたのだろうか。臓器移植における脳死を巡って交わされた論議の背景にも、身体観の違いが大きく影響していた。臓器移植を成り立たせている西洋医学的身体観は、臓器を身体の一部としてみる機械論的な心身二元論がその基盤にある¹⁾。二元論的身体観は、Platon の対話編にみられる理性的霊魂の不滅、アリストテレスの霊魂論²⁾ など、古代ギリシャの哲学的霊魂観にさかのぼる。この哲学的霊魂観、すなわち魂や精神に対して身体を第二義的に扱う身体観は、ユダヤ教やキリスト教などにおける霊肉二元の宗教思想と結びついて、西洋の思想的な中核を形成してきた。

そして、Descartes (1596-1650) は「精神は物体に、物体は精神に、いかなる意味においても依存しない」とひとの本質は意識（コギト）の主体、すなわち心にあるとした。近代科学（自然科学）は、この Descartes 哲学の心身二元論との出会いにより普及したともいえる。Harvey の血液循環論（1628 年）に始まったとされる近代（西洋）医学も、身体を精神から分離し、機械論的見方をするによりめざましい発展を遂げた。物体としての身体の生理的構造・機能、その異常としての病気を対象とすることで、幾多の感染症を克服し、さまざまな病気の治療法の開発に寄与した。現代（西洋）医学の「命の贈り物」といわれる移植、再生、遺伝子治療などの先端医療も、そうした文脈の中で誕生した。

しかし Descartes の「われ思う、故にわれあり (cogito, ergo sum.)」という言葉は、感覚や運動、行為における心身の統合を抜きには成り立たないという事実を含んでいる。この事実が、Nietzsche (1844-1900) に「近代人は身体的重要性を忘れて」と言わしめ、Bergson (1859-1941)、Spinoza (1632-77) から一元論者による Descartes 的心身二元論の批判が始まった。そして、Merleau-Ponty (1908-61) の「知覚の現象学」(1945)³⁾ により、それまで第二義的にみられていた身体は、「生きられる身体」として、現象学の主題となった。

そうした動きは、医学においてもみられる。19 世紀初頭にドイツで誕生した心身医学⁴⁾

は、Freud (1856-1939) のヒステリーや神経症研究による心身相関⁵⁾を理論的背景として、1930年代にアメリカで体系化された^{6, 7)}。

そして、心身二元論を基盤とした近代(西洋)医学の身体機械論的見方の行きづまりの中で、注目されるようになったのが補完・代替療法^{註1)}である。補完・代替療法は、大学医学部で教育されている西洋医学以外の療法を総称したもので、1970年代にアメリカで模索が始まり、1980年代には欧州各国にも広がった。わが国でも1997年に、日本代替医療学会(2000年に日本補完・代替医療学会に名称を変更)が設立された。

近代(西洋)医学は、「病める人(patient with illness)」から「疾患(disease)」を客体化することで、原因を究明し、治療法を発見し、多くの成果をあげた。その一方で、高齢化や生活環境の変化に起因する生活習慣病や心身症の増加など、心身相関を考慮し、心身全体を管理する総合的な医療の必要性がクローズアップされるようになった。

身体観の変化という視点からすれば、精神と身体を区分し、身体を第二義的な物体として扱ってきた古代ギリシャから近代合理主義に至る身体観が問い直され、心身の相関の新たな認識と、近代科学が意図的に軽んじてきた身体の実在性の復権であろう。

身体観：心身一如の世界

補完・代替療法には、道教と関係の深い中国医学やヨーガ哲学を基盤としたインドの伝統医学アーユルベエダをはじめ、気功、指圧、マッサージ、カイロプラクティック、整体などの手技療法、薬草、健康食品、食事療法などの健康増進法、瞑想療法、イメージ療法などが含まれる⁸⁾。それらの多くは、禅やヒンズー教のヨーガの修行など東洋思想の伝統的な身体観を背景としたものである。

東洋思想においては、精神(心)と物質(身体)を明確に区別する二元論的考え方はなかった⁹⁾。わが国では、鎌倉時代の初期に臨済宗を伝えた禅密兼修の僧栄西(1141-1215)が用いたという「心身一如」^{註2)}が理想とされてきた⁹⁾。禅における修行は、厳しい拘束を自己の心身に課し、身体で覚え込む体得によって、悟り(意識の開け)の境地に達するものである。道元(1200-53)も、「正法眼蔵」で「身と心とをわくことなし」といい、修行のはじまりは身体のある方が心のある方を決めていくことにあるとした¹⁰⁾。このような禅の修行における体得の思想は、芸の道でも稽古に取り入れられ、世阿弥(1363?-1443?)は、その能楽論「風姿花伝」で、「心」の動きと「身体」の動きを一致させる、身体の主体化が能の稽古や修行であるとした¹¹⁾。心身二元論、心身相関、心身一如をイメージで比較すると図1のように表すことができよう。

この東洋的身体観は、近代日本哲学の背景となり、西田(1870-1945)は「身体といふものなくして、我といふものはない」といい¹²⁾、さらに道具を身体との関連でとらえると同時に自分の身体をも道具としてみた。西田哲学における自己、身体、道具、世界の関係を簡略に示すと図2のようになる。この西田の道具と身体の関係に対する認識は、後述

する身体図式 (body schema) と身体像 (body image) の関係そのものである。

日常と身体：身体図式と身体像

私たち一人ひとりがただ一つの身体をもって生まれ、自分の思いを他者に伝えたり、実現できるのも、身体を通して成り立っているが、健康な日常生活においては、身体を意識することなく暮らしている。私そのものである身体を、私が意識することなく日々過ごせるのは、身体図式 (body schema)、身体像 (body image) と称される脳内にある私の身体の表象、空間像による。

身体図式とは、Merleau-Ponty が「習慣的身体 (le corps habituel)」³⁾ というように、繰り返された経験によって組み替え更新される、習慣としての身体の表象である。身体図式は、感覚的経験や運動的体験の蓄積により形成され、恒常性をもち意識下で働く、自分の身体の空間的なイメージを成立させる役割を担っている。身体像は、その身体図式を基盤として構成された、意識された身体的设计図にあたる。身体の意識が必要な状態において、身体図式を文法に身体像が立ち上がり、道具を手によれば、身体像はその道具を身体の延長として取り込み^{13, 14)}、ダイナミックに対応する。

そして身体図式も、その習慣としての恒常性を保ちながら、加齢や心身の機能・構造の変化に対応して、身体の動きと連動した情報を系に組み込み、緩やかに身体の変化に対応した身体図式へと更新される。この脳内にある身体の表象、空間像が、対象との相互性の中でダイナミックに変動しながら安定性を保っていることで、私たちは環境や状況に適応した生活ができている。

たとえばリンゴを

身体図式、身体像はどのように働いているのか、たとえばリンゴの皮をむいて食べる時のことを考えてみよう。今、目の前のテーブルの上に一つのリンゴがある。そのリンゴの赤い色と肌の質感、その感覚的クオリアにより、さまざまな志向的クオリアが私の中に満ちあふれる^{15, 16)}。そこに生まれる志向的クオリアとは、これまでの経験により想起される、リンゴの香り、シャクッと一口噛んだ瞬間に口の中に広がる果汁、シャクシャクと噛む歯触り、「赤いリンゴに 口びるよせて～ だまあって見ている青い空～」と思わず口ずさむ「リンゴの歌」(昭和 20 年制作の映画「そよ風」の主題歌、並木路子：歌)と共に浮かぶ、甘酸っぱくほろ苦い記憶が、混然として心の中に立ち上がる質感である。

リンゴに手を伸ばし、リンゴを手にとる。ナイフに手を伸ばし、ナイフをつかむ。その意識することのない動きは、私の身体図式を基盤として、リンゴの皮をむいた経験から立ち上げられた初期身体像によるものである。そして、リンゴをむき始めると、皮の厚み、ナイフの切れ味、手の動き、それらの情報が刻々とフィードバックされ、立ち上がっていた初期身体像は、今まさに手にしているナイフを取り込んだ新たな身体像へと瞬時に修正

される。

ナイフはまるで私の手の機能の延長であるかのように、リンゴをむく。皮をむき終え、リンゴを切り分け、ナイフをおいた瞬間に、ナイフへの身体の拡張は消え、ふたたび元の身体図式が機能を始める。そして、皿に盛られたリンゴによる新たな志向的クオリアが私を満たす。この運動・感覚情報のフィードバックシステムを簡単に示すと、図3のようになる。

「やまい」や「しょうがい」による関係の喪失

健康な日常生活においては、自分の身体を意識することなく暮らしているが、身体が不全になったり、身体の機能・構造を失ったときに、ひとはその存在を意識する¹⁷⁾。

たとえば「脳の中の幽霊」¹⁸⁾や「妻を帽子とまちがえた男」¹⁹⁾に出てくる幻肢 (phantom limb) は、16世紀にフランスの外科医 Paré A(1510-90)が初めて記述したもので、事故などによって四肢を失った者が、「現実的身体」として手足がないことを知りながら、「習慣的身体」としての身体像はまだ修正されてないため、存在しない手足に体感や運動感覚を感じ、手足があるかのように行動したり、痛み・かゆみを感じる現象である。イギリスの Richard Morton が、1689年に「神経性消耗症」と称して症例を記載した摂食障害の神経性無食欲症²⁰⁾は、身体のふくらみが消え、骨が浮きあがるほどやせながら、自分の「現実的身体」を受け入れようとしないというものである²¹⁾。

表1に例としてあげたように、「やまい」や「しょうがい」においては、身体の表象、空間像もダイナミックな対象との関係を失い、心身の機能は低下し、自己と身体の間にはさまざまな違和が生じる。自己と身体の調和した関係性の喪失は、生活との関係性の喪失となる。

コミュニケーションとしての作業・身体

「やまい」や「しょうがい」により失った生活とのかかわりを取り戻す試みは、自分の身体が「わが(思う)まま」に動いてくれるかどうか、「自己の身体のかめ」から始まる。そして身体の表象、空間像が対象との関係の中でよみがえり(身体図式の現実的な更新)、わが身が「ともにある身体」としてリアルな存在になることで、あるべき生活の回復もしくは新たな生活の再建へと向かう。

あるべき生活の回復、すなわち主体性の回復は、自己の身体性の回復により、身体との関係性を回復することであり、生活の再建は、生活との関係、社会との関係を回復することである。身体を通して、すなわち作業活動に伴う五感のフィードバックを確かなものとして体感し、感知し、主観としての自己との相互関係として対象を認識する、そのプロセスを通して、私たちは「いま、ここ」にある自分を確認できる。この回復プロセスは、自己と身体とのコミュニケーション、自己と生活とのコミュニケーションに他ならない。

自分と身体とのコミュニケーション，すなわち五感を通して自分の「からだの声」に耳を傾ける身体的确かめには，作業における対象操作が手段となり，そして現実生活との関係性の回復にあたっては，対象操作により確かめられリアルな存在となった身体が，自己と生活とのコミュニケーションの手段となる．作業活動において身体を使う，道具を使うという経験の繰り返しが，世界と対比する自己の基盤となる身体図式を作る．作業により，自己の基盤が作られる．

そうした意味において，作業療法は，作業・身体を介して，私とわが身，そして対象世界との関係性の回復という，コミュニケーションプロセスをファシリテートする役割を果たすものといえる．

エピソード

最後に，事故により失った身体との関係性を作業療法のかかわりにより取り戻した A さんのエピソードを紹介する．

「おかしいもんやねえ，ここ(右の手足)見えてるのに，さわってもわからへん．力入りませんわ」「いっつも，足もと見んとね，下に(足が)着いとるかどうかわからんから，よう転びかけます」という A さん．

何人も人を使い神社や寺院の銅板建築板金を請け負っていた A さんは，自転車で転倒し，右側頭部骨折，左側頭葉脳挫傷，外傷性脳内出血，外傷性くも膜下出血，右急性硬膜下血腫がみられた．術後，意識混濁，失見当識，失語（感覚＋運動），右片麻痺，右同名半盲などの障害に対するリハビリテーションが開始されたが，思わしい進展はみられず，3カ所の病院やリハビリテーション施設を経由し，受傷から1年後に当大学病院精神科神経科で外来受診が始まった．その2年半後，新しく開設した精神科作業療法で，高次脳機能障害への対処を始めたことを契機に，作業療法に処方が出された．受傷から3年半が経過していた．

作業療法に紹介されたときには，頭部外傷による広汎な脳の損傷，特に側頭葉の損傷が大きく，感覚失語，記銘力障害，意味記憶障害がみられた．さらに，頭頂葉，後頭葉両側にもその損傷が及び，視覚失認，観念失行があり，日常生活に大きな支障をきたしていた．2年あまり外来受診で治療を受けていた臨床心理技術者の名前も覚えることができず，受診は家族同伴，右半身の感覚は全くなく，何とか自立歩行はできるが，常に右足の着地を目で確認しないと歩行が困難という状態であった．右手は，意識しないときには軽い物をつかむ程度のことはできるが，握手をすると握り返すことができず，実用手としては機能していなかった．

受傷後，リハビリテーションでも両手を用いる作業をしたことがないという A さんに，もしやという作業療法士の直感から，簡単な銅板細工を導入した．見ただけでは何に使うものか，どう使うかわからない木槌も，手にとると，崩れたとはいえ，長年建築板金で

培われた身体図式が少しずつよみがえり、2ヶ月あまりで2作の作品ができ、力のコントロールも少し可能になった。そして、鋏やカッターナイフ、刻印の使用のために、皮のモザイク、スタンピング、切り絵と進め、一人で通院し、受診受付、支払いも行えるようになった。

作業療法に通うようになってから、毎日玄関先に椅子を出して腰掛け、勤め先から帰ってくる奥さんを待つようになったというAさん。「大変ですわ」というAさんと向き合う大変さを暮らすのは、奥さん。それでも、毎日玄関で待っていて「お帰り」というAさんの笑顔に救われると、家計を交代した奥さんがいわれた。「前はね、私が働いてね。今は反対ですわ。奥さんが働いて」と屈託なく笑うAさん。

今は、感覚も回復し、右手も実用手として日常生活に大きな支障はない。「これ？ そう、わたしの手。前はね、ちゃんと動かんし、さわってもわからなかったけど、今はね、もうわかるようにね、なりました」。故障した脳の機能を補いながら、Aさんの生活は前向きになった。

おわりに

作業療法士は、言葉が意味記号としてのコミュニケーション機能を、十分果たさない状況においても、身体の共通性、五感と身体を介した共有体験を「伝え」「伝わり」の手だてとしてきた。

身体が世界(対象)を感受し、感覚、知覚する。対象をどのように扱うか、それは対象がアフォードしているクオリアを、私が私の身体によりどのように認識(身体的認識)しているかによって決まる。あらためて、作業療法における作業と身体性の意味を問い直したい。

文献

- 1)美馬達哉：臓器移植ーバロック的技術としての。医療人類学 5：4, 1989.
- 2)Aristoteles (山本光雄, 福島民雄・訳 9：靈魂論 自然学小論集 氣息について (アリストテレス全集 6)。岩波書店。東京, 1968.
- 3)M Merleau-Ponty (中島盛夫・訳)：知覚の現象学。法政大学出版局, 東京, 1982.
- 4)Heinroth JCA (西丸四方訳)：ハイソロート狂気の学理。中央洋書出版部, 東京, 1990.
- 5)Freud (懸田克躬, 小此木啓吾・訳)：ヒステリー研究他。人文書院, 1974.
- 6)筒井末春：心身医学の歴史。石川 中, 末松弘行・編, 心身医学, 朝倉書店, 東京, 1979, pp.12.
- 7)中川哲也：心身医学の歴史。石川 中・編, 心身医学の進め。筑摩書房, 東京, 1985.

- 8) 蒲原聖可：代替医療－効果と利用法．中央公論新社，東京，2002.
- 9) 湯浅泰雄：身体論－東洋的心身論と現代．講談社，東京，1990.
- 10) 道元（水野弥穂子・校注）：正法眼蔵．岩波書店，東京，1993.
- 11) 世阿弥（野上豊一郎，西尾 実・校訂）：風姿花伝．岩波書店，東京，1991.
- 12) 西田幾多郎：西田幾多郎全集第8巻－哲学論文集第2-3．岩波書店，東京，2003.
- 13) Iriki A, Tanaka M, Iwamura Y：Coding of modified body schema during tool use by macaque postcentral neurons. *Neuroreport* 7：2325-30, 1996.
- 14) 入来篤史：道具を使うサル．医学書院，東京，2004.
- 15) 茂木健一郎：脳とクオリアーなぜ脳に心が生まれるのか．日経サイエンス社，東京，1997.
- 16) 茂木健一郎：心を生み出す脳のシステム．日本放送出版協会，東京，2001.
- 17) 山根 寛：身体と作業活動．ひとと作業・作業活動第2版．三輪書店，pp.44-49, 2005.
- 18) Ramachandran V S, Blakeslee S（山下篤子・訳）：脳の中の幽霊．角川書店，東京，1999.
- 19) Sacks O（高見幸郎，金沢泰子・訳）：妻を帽子とまちがえた男．晶文社，東京，1992.
- 20) Vandereycken W, van Deth R（野上芳美・訳）：拒食の文化史．青土社，東京，1997.
- 21) 山根 寛：精神障害に伴う食の異常・障害へのアプローチ．山根 寛，加藤寿宏・編．食べることの障害とアプローチ．三輪書店，pp.20-35, 2002.

注1：米国の国立補完代替医療センター（NCCAM）は，補完代替医療を，①インドのアーユルベーダや中国などにみられる伝統医学に類する代替医学システム，②精神と身体の相互作用に働きかけるもの，③食べ物や薬草などの生物学的作用を利用するもの，④手技・身体を介するもの，⑤気功など自己内外に存在するエネルギーを利用するもの，の5領域に分けて研究を行っている⁸⁾。

注2：禅の瞑想における内面的瞑想と外的行動の両者が向う理想的境地．心と身体は不可分で，心と身体に見出される二元的で両義的な関係が克服され，そこから意識にとって新しい展望がみえてくることを意味する⁹⁾。

表1 「やまい」「しょうがい」と身体

失った四肢の存在を感じる	: 幻肢
現実的身体を認めない	: 摂食障害
身体の一部を無視する	: 半側身体失認
身体が思うように動かない	: 中枢神経障害による麻痺等
身体が思いとは異なる動きをする	: 不随意運動
身体が示し語る	: 身体表現性障害
身体がなしたことが記憶にない	: 解離性障害
身体を実体として感じない	: 離人性障害

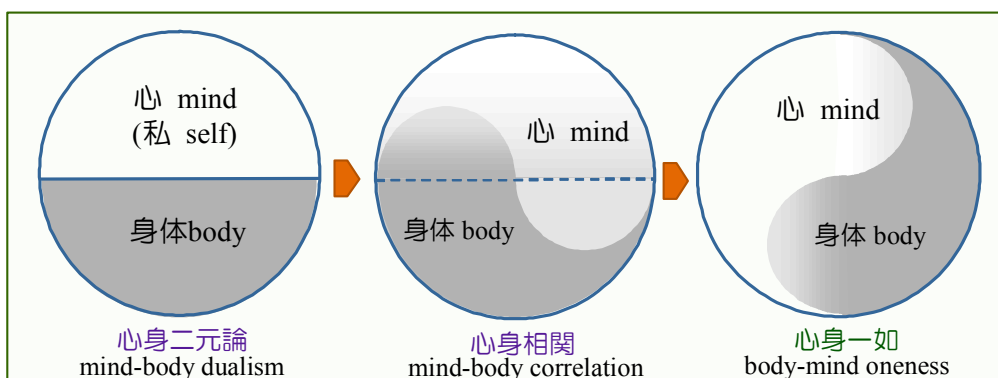


図1 身体観のイメージ

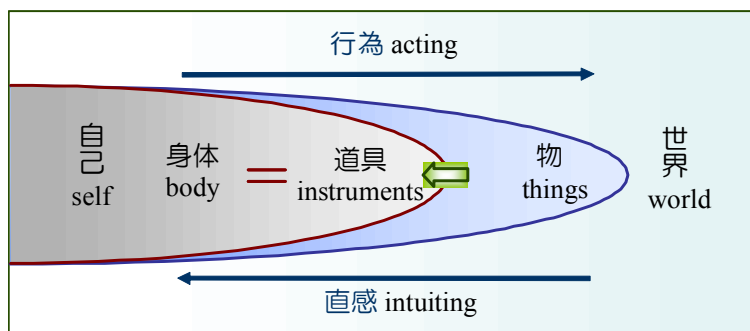
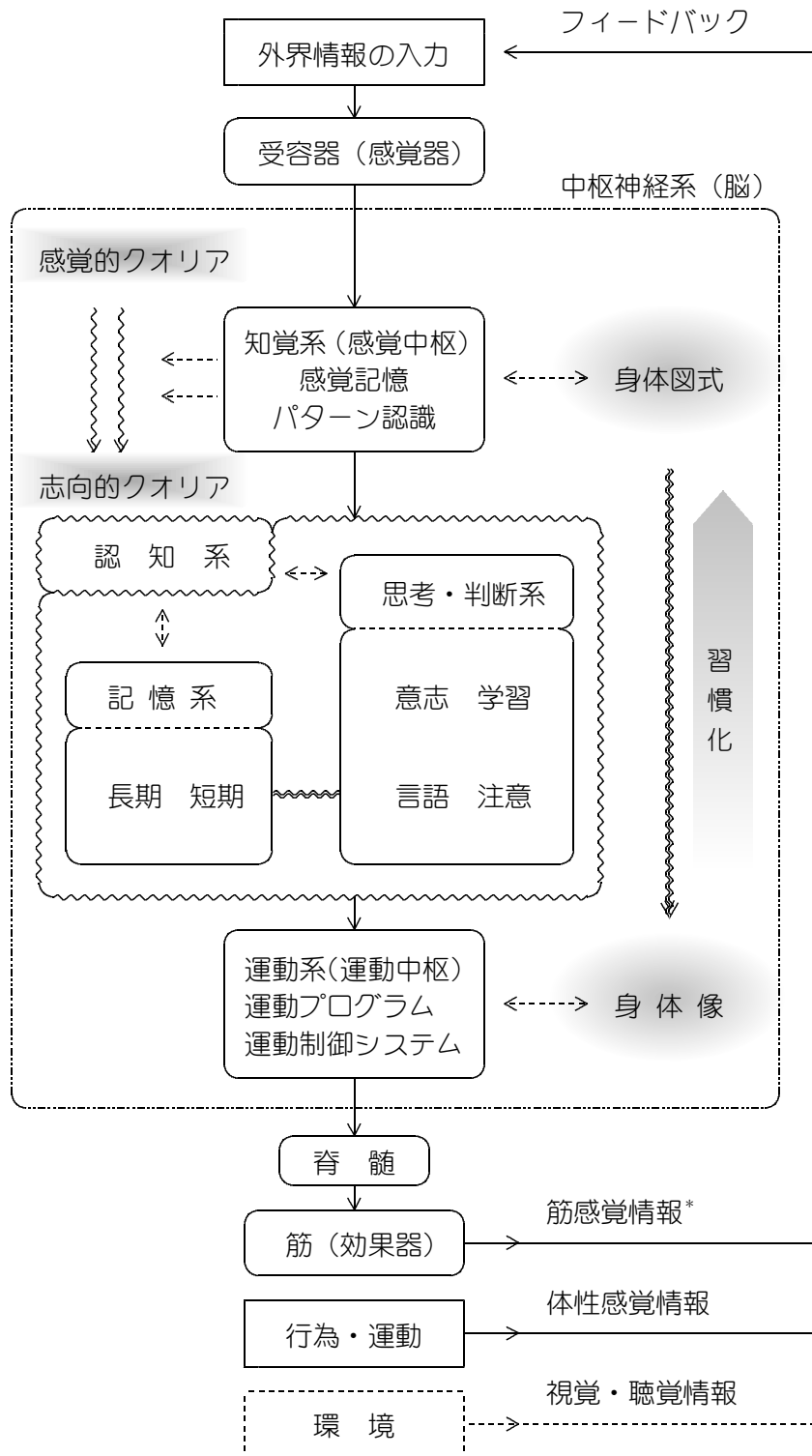


図2 西田哲学における自己・身体・道具・世界の関係



*筋感覚は体性感覚の一部にあたる

(山根 寛：ひとと作業・作業活動第2版¹⁷⁾より修正)

図3 運動・情報フィードバックモデル